

虎ノ門事件判決文

判決書

山口県熊毛郡周防村二百五十七番屋敷 無職

被告人 難波 大助

(明治三十二年十一月七日生)

右刑法第七十三条ノ罪ニ関スル被告事件審理ヲ遂ケ判決スル
コト左ノ如シ

主 文

被告人大助ヲ死刑ニ処ス

押取物中大正十二年押第一三二七号ノ二ノ葉莖及同号ノ七ノ
弾莖実包四箇ハ之ヲ没収ス

理 由

被告人大助ハ歴史上由緒アル難波家ニ生レ嘗テ県會議員衆議

院議員タリシ難波作之進ノ四男ニシテ曾祖父軍庵ハ維新ノ際
王事ニ尽シタルノ故ヲ以テ特ニ 先帝陛下ニ拝謁ヲ賜ハリ歿
後贈位ノ恩典ニ浴シ被告人ノ父作之進モ亦皇室尊崇ノ念篤ク
被告人ハ嚴格ナル父ト慈愛深キ母トノ薰陶ヲ受ケテ人ト成リ
克ク父母ニ仕ヘ難波家ノ伝統的精神ヲ体シ皇室中心主義ヲ奉
シ其ノ中学時代タル大正六、七年頃ニ於テハ書ヲ雜誌武俠世
界ニ寄セ乃木將軍ノ死後我國ノ上下浮莖輕佻ニ流レ世界無比
ノ皇室ヲ奉戴スル我帝國ハ危殆ニ瀕スルモノトシテ大ニ之ヲ
慷慨シ、大元帥陛下ノ統帥シ給フ軍隊ニ入營スルヲ以テ臣民
ノ光榮ナリト為シ徵兵忌避者ヲ不忠ナリト論シタルコトアリ
又当時大阪朝日新聞カ皇室ノ尊嚴冒瀆ニ関スル記事ヲ掲載シ
タル際同新聞ヲ攻撃シ父ト共ニ其ノ不説不買ヲ知人間ニ奔走

勸誘シタルコトアリテ臣民ノ大義ヲ守リ愈ル所ナカリシカ被告
 人ハ曩ニ大正六年二月慈母ヲ失ヒ其ノ境遇ニ変化ヲ来シタル
 為苦學ヲ自ラ立タンコトヲ決意シ東京ニ走リタル以來東西
 各地ニ転学流寓シ再三上京シテ或ハ中学検定試験ニ志シ或ハ
 屢高等学校ノ入学試験ニ応シタルモ終ニ其ノ志ヲ得シテ大
 正十年ニ及ヘリ而シテ其ノ間父ヨリ支給セラル、學資頗ル薄
 ク常ニ父ヨリ儉素ヲ旨トスヘキコトヲ命セラレ已ムコトヲ得
 スシテ自炊ヲ為シ又ハ新聞配達ニ従事シテ自給ヲ計リ窮乏ヲ
 忍ビ具サニ辛苦ヲ嘗メタル処大正八年偶マ四谷区谷町ノ陋隘
 ナル一室ニ起居シテ通學ヲ為スニ方リ親シク附近ノ貧民窟ヲ
 目撃シ之ヲ自己ノ悲境ニ比シテ生活ノ艱難ヲ覺ユルニ從ヒ漸
 次思想ノ變化ヲ来シタルニ際シ恰モ世界大戰ノ後ヲ羨ケ露獨
 ノ帝政崩壊シソウキエツト政府ノ組織セラル、アリ又歐米民
 主主義ノ風潮我國ニ瀰漫シ為ニ被告人ノ精神ニ多大ノ刺激ヲ
 与ヘ茲ニ我國建国ノ歴史ニ疑念ヲ挾ミ皇室ニ對スル被告人從
 來ノ信念ニ動搖ヲ生スルニ至レリ大正九年第四十二帝國議會
 ノ開会セラル、ヤ當時被告人ハ衆議院ノ傍聴席ニ在リテ其ノ
 混乱セル議場ノ醜態ヲ觀議員ニ對スル尊敬ノ念ヲ失ヒ又普通
 選挙反對ノ演説ヲ聴キ我國ノ政治家カ頹迷ニシテ民衆ノ利害
 ニ意ヲ用キナルモノトシテ大ニ之ヲ憤慨シ痛ク議會政策ノ非
 ナルヲ感シ同年五月帰省シタルニ時偶マ総選挙ニ當リ確乎タ
 ル主義政見ヲ有セサル父作之進力単ニ家名ノ為候補ニ立チ巨

額ノ冗費ヲ為スコトヲ吝マサルヲ見テ自己ニ對スル節儉ノ訓
 告ハ固ト是レ一片ノ虚言ニ過キスト為シ父ニ對シテ大ナル反
 感ヲ懷キ越テ大正十年ニ至リ雜誌改造、解放社会主義ニ関ス
 ル著書、露國ノ小説等ヲ耽讀シ又社会主義的傾向ヲ有スル朋
 友ニ交ルニ及ヒ社会主義的思想ハ漸ク被告人ノ腦裏ニ浸潤ス
 ルニ至レリ當時被告人ハ父ヨリ僅少ナル補給ヲ受ケ勉學ノ傍
 再ヒ新聞配達ヲ業トシ父ノ代議士タル地位ト自己ノ労働者タ
 ル境遇トヲ對比シテ益々反感ノ度ヲ高メ私有財産制及家族制
 度ヲ呪詛シ又大正十年発売禁止トナリタル雜誌改造ノ四月号
 ニ掲載セラレタル断片ト題スル文章ヲ讀ミテ露國ノ「テロリ
 スト」ニ同情シ「テロリスト」ノ行動痛烈ニシテ露國ノ革命
 ハ此等ノ徒ニ負フ所尠ナカラストシテ大ニ之ニ共鳴シ尋テ同
 年四月中幸徳事件ノ判決ヲ掲載シタル當時ノ新聞ヲ讀ミ其ノ
 処罰ヲ殘忍ナリト為シ深ク幸徳等一派ノ者ノ心事ヲ憐ムト共
 ニ彼等ト主義ヲ同クスル者ノ何等為ス所ナク屏息スルヲ以テ
 怯懦ナリトシテ大ニ之ヲ憤慨シ決死ノ覚悟ヲ以テ自ラ暴力即
 時遂行者タラントスルノ意ヲ決スルニ至レリ其ノ後幾ハクモ
 ナク社会主義ノ講演会ニ赴キタル際臨監警察官カ其ノ演説ヲ
 中止シ片言隻句タモ免セシメス即時解散ヲ命シタルヲ見テ言
 論ノ自由ヲ与ヘサルコト既ニ此ノ如シトセハ主義者カ言論ニ
 訴フルコトヲ為サスシテ直接行動ノ手段ニ出ルコトアリトス
 ルモ是レ皆ナ官憲自ラ招ク孽ニシテ其ノ責主義者ニ存スルニ

非スト思惟シ又從來躬ヲ実験シタル労働生活ニ稽フレハ現時
 ノ社会ハ多數窮民ヲ救済スル施設ニ乏シキヲ以テ速ニ社会ノ
 状態ヲ变革スルコトヲ努メサルヘカラスト為シ學生生活ヲ擲
 チ専心此ノ種ノ運動ニ従事セントシタルニ父兄ヨリ痛切ナル
 訓戒ヲ受ケ之ニ服シテ大正十一年四月以來早稲田高等学院ニ
 入学シタルモ平生學課ヲ怠リ好テ社会問題ノ講演会ニ出席聽
 講シ傍ラ暴力社会主義者及無政府主義者ノ著作ヲ耽讀シテ益
 ヲ社会ノ变革ハ暴力ニ依ルノ外ナシトノ信念ヲ鞏固ナラシメ
 其ノ思想愈惡化スルニ及ヒ被告人ハ断然其ノ學生生活ヲ廃シ
 労働者トナリテ下層生活ヲ營ミ自ラ労働者解放運動ノ一兵卒
 トナリ主義ノ為奮闘スルノ意ヲ決シ大正一二年二月退學シテ
 深川区富川町所在ノ木賃宿ニ移リ下層ノ労働ニ服シタルニ勞
 働ノ辛苦生活ノ困憊深ク心肝ニ徹シ有産者ニ對スル忿恚反抗
 ノ情ヲ激越ナラシメタリ同年五月病ヲ得テ帰省シ父兄ノ言ニ
 服シテ足ヲ生家ニ駐メタルモ被告人ノ思想却テ一層ノ險惡ヲ
 加ヘ無自覺ナル労働者ヲ指導統率シテ多衆ノ團結ヲ組織シ政
 權ヲ獲得シテ無産者独裁ノ制ヲ採ルノ要アリト為シ終ニ共產
 主義ニ共鳴シ更ニ「マルクス」ノ共產主義宣言ヲ熟読スルニ
 及ヒ益々其ノ信念ヲ強フスルニ至レリ其ノ間屢東京ニ往來シ
 大正十二年九月ノ大震災ニ際シ官憲ノ採レル措置ヲ快トセス
 速ニ徹底シタル行動ニ出ルニ如カスト思惟シタルニ方リ父ヨ
 リ汝ノ主義ヲ棄テ父ノ命スル所ト長兄ノ訓戒スル所ニ從テ行

動スヘシトノ敵訓ヲ受ケ被告人ノ進退玆ニ谷マリ遂ニ暴力遂
 行ノ計画ヲ決然敢行セントシ我國ノ 列聖汎ク万民ヲ愛撫シ
 給ヒ皇恩四海ニ洽ク臣民亦奉テ皇室ヲ翼戴シ苟モ帝國臣民タ
 ル者ハ其ノ地位階級ノ如何ヲ問ハス均シク皇恩ニ浴スヘキモ
 ノナルコトニ想到セス畏クモ皇室ト共產的思想トハ兩立スヘ
 カラスト妄斷シ言論ニ依ルモ其ノ効果少ナシト為シ皇族ニ對
 シ危害ヲ加ヘテ共產主義者ノ決意ヲ示シ因テ以テ一面ニ於テ
 ハ現時我國ニ於テ主義宣傳ニ関シ言論ノ自由ヲ許サス労働組
 合ヲモ公認セス銃劍ヲ以テ自由思想ニ對スル權力階級者ト戰
 ヒ權力階級者及資本家カ皇室ヲ奉擁シ労働者及社会運動者ニ
 加フル圧迫ヲ除去シテ無産者ノ危急ヲ防救スヘク他面ニ於テ
 ハ大震災ニ當リ無黨ノ労働者社会主義者ヲ殺戮シタル反動団
 体ノ暴狀ニ對シ其ノ反省ヲ促シ尚進シテハ現ニ我國ノ無産者
 間ニ澎湃タル皇室中心主義ノ信念ヲ放擲セシメントテ目的
 トシ同志ニ囑ルコトナク独リ其ノ事ニ當ルヲ以テ万全ノ策ナ
 リト為シ其ノ機ヲ窺ヒ居リタル処同年十一月中父作之進ハ被
 告人ノ心氣ヲ転セシメンカ為銃獵ヲ許サヤ被告人ハ家ニ杖銃
 ノ在ルヲ憶ヒ之ヲ使用シテ不逞ノ意思ヲ遂ケント欲シ同年十
 二月中旬山口県玖珂郡柳井町大字柳井津ニ友人ヲ訪問シタル
 序次同所金物商宮本謙一方ニ於テ第二番ノ大形散彈ヲ買求メ
 同月二十二日其ノ散彈火藥ヲ填充シタル彈藥実包五箇及杖銃
 ヲ携帯シ家ヲ出テ、京都ニ下車シ同市ニ滞在在中二十五日朝新

聞ニ依リ 皇太子殿下ノ同月二十七日帝國議會開院式ニ行啓アラセラル、コトヲ知り 殿下ニ對シテ危害ヲ加ヘンコトヲ決意シ二十六日杖銃彈ヲ携帶シテ急遽京都ヲ出發シ翌二十七日午前八時二十分東京駅ニ到着シ同所ニ於テ杖銃ニ彈藥ヲ裝填シタル後芝区琴平町一番地、地先西洋家具商あめりか屋前ニ抵リ路傍拝觀者ノ群ニ混シテ御通過ヲ待チ受ケ同日午前十時四十分頃御召自動車ノ過タルヲ見テ警戒線ヲ突破シ畏クモ 皇太子殿下ニ咫尺シテ杖銃ヲ發射シ其ノ散彈自動車ノ窓硝子ヲ破壊シテ車室内ニ飛散シタルモ殿下ニハ恙アラセラレサリシモノナリ

仍テ証擲ヲ按スルニ如上ノ犯罪事實ハ公判ニ於テ被告人ノ自白スル所ニシテ尚左記一乃至七ノ証擲ヲ考覈シテ犯罪ノ証明其ノ他犯罪ノ動機及原因ノ認定ヲ為スニ十分ナリ

一、皇太子殿下ノ御召自動車カ虎ノ門ヲ過クル際一兇漢アリテ御召自動車ニ近ツキ杖銃ヲ發射シタルコトハ御召自動車ノ運転手タリシ証人隈元一郎及第二後駆自動車ノ運転手タリシ証人秋本貞雄ノ各訊問調書ニ依リ之ヲ認メ杖銃ノ發射ニ因リ散彈ハ窓硝子ヲ貫キ御召自動車ノ車室内ニ散亂シ危険 皇太子殿下ニ逼リタルモ 殿下ニハ恙アラセラレサリシ事實ハ當時御陪乗ヲ為シタル証人入江為守ノ訊問調書及御召自動車檢証調書中御座席ノ右側硝子戸ニ銃約一寸四分横約一寸八分ノ不正円形ノ貫通孔アリ車室内天井ノ左後隅

ニ偏シタル附近ニ五個所ノ示指頭大ノ彈痕アリトノ記載並ニ押第一三一七号ノ百四乃至百四十六ノ硝子ノ破片、粉末及彈丸ノ破片ニ依リ之ヲ認メ被告人カあめりか屋前ノ拜觀者ノ群集中ヨリ走り出テ杖銃ヲ發射シ直ニ警視庁巡查ノ為逮捕セラレタルコトハあめりか屋前ノ警戒ノ任ニ當リタル警視庁巡查証人西璋二、為我井通次郎被告人ヲ逮捕シタル警視庁巡查証人松戸正衛及被告人使用ノ杖銃ヲ奪ヒタル補助憲兵証人竹花武夫ノ各訊問調書ニ依リ之ヲ認ム

二、被告人カ押収ノ杖銃ニ押収ノ彈藥実包ト同一ナル実彈ヲ籠メ之ヲ發射シタルコトハ前記証人竹花武夫ノ訊問調書及大正十二年押第一三一七号ノ一ノ杖銃、同号ノ二ノ藥莢、同号ノ七ノ彈藥実包ニ依リ之ヲ認メ發射シタル散彈ハ大正十二年十二月中旬被告人カ柳井津ノ宮本謙一方ニ於テ買取リタル第二番大形ノモノナルコトハ被告人ノ所持シタル押第一三一七号ノ六ノ残存セル散彈ト証人梅田与一第二回及第三回訊問調書中被告人カ宮本謙一方ニ散彈ヲ買取リタル旨ノ供述記載並ニ証人宮本謙一ノ訊問調書中押第一三一七号ノ六ノ散彈ハ第二番大形ニシテ自分店ニテ販売スル所ノモノト同一ナリトノ供述記載トニ依リ之ヲ認ム

三、被告人カ大正十二年十二月二十五日頃京都ニ於テ翌々二十七日 皇太子殿下ノ議會行啓ノ際危害ヲ加ヘンコトヲ決意シタルコトハ被告人カ同年同月二十六日京都圖書館ニ於

テ認メタリト公判ニ於テ供述スル新聞記者、友人及弟謙亮ニ宛タル大正十二年押第一三一七号ノ十九乃至二十五、同号ノ百九、百三十五ノ被告人發送ニ係ル九通ノ書狀ニ依リ之ヲ認ム

四、被告人カ犯罪ノ決意ヲ為スニ至リタル動機ニ付テハ皇室ト共產主義トハ相兩立セスト思惟シ言論ノ圧迫ト戦ヒ反動団体ノ反省ヲ促スト同時ニ権力階級及資本家ノ圧迫ヲ除キ無産者ノ懐ケル皇室中心主義ヲ放擲セシメンコトヲ目的トシテ此等ノ者ノ奉戴スル皇族ニ危害ヲ加ヘントスルニ在リタルコトハ被告人ノ第五回訊問調書ニ其ノ旨ノ供述記載アリ之ト照應スル前項所載ノ九通ノ書狀及押第一三一七号ノ三十九、四十二、百三十八ノ五ナル歌川克己ニ宛被告人ノ發送シタル書狀ニ依リ之ヲ認ム

五、被告人カ大正十二年十月以來生家ニ在リテ犯罪敢行ノ期ヲ窺ヒタルコトハ大正十二年押第一三一七号ノ四十六、四十八、百三十八ノ二乃至五ノ歌川克己宛被告人發送ノ書狀ニ依リ之ヲ認メ同年十二月中杖銃ノ手ニ入りタルヲ以テ之ヲ使用シテ皇族ニ危害ヲ加フル意思ヲ有シ杖銃及彈藥実包ヲ携ヘ同月二十二日郷里ヲ出發シタルコトハ証人宮本謙一方ニテ散彈ヲ買入レタル前記徵憑事實並殘存セル押第一三一七号ノ七彈藥実包四個及之ヲ準備シテ杖銃ト共ニ携帶シ京都ヲ經テ上京シ犯罪ヲ敢行シタリトノ公判ニ於ケル被告

人ノ供述ニ依リ之ヲ認ム

六、被告人カ当初皇室中心主義ヲ奉シタルモ思想變化シテ社會主義者トナリ大正十年四月暴力即時遂行者トシテ立ツノ決心ヲ為シ最後ニ共產主義ヲ懐クニ至レル顛末ハ被告人ノ第三回訊問調書ニ依リ明ニシテ就中暴力即時遂行ノ決意ヲ為シ又共產主義ノ思想ヲ有シタルコトハ叙上引用スル被告人發送ノ書狀及歌川克己第一回訊問調書中「テロリズム」ハ労働運動ノ最前衛ナリト被告人ハ談シタルコトアリトノ供述記載アルニ依リ之ヲ認ム

七、被告人カ中学時代ニ於テハ學費ノ給与薄クシテ常ニ生活ノ不安ヲ感シ終ニ父ニ對シ反感ヲ懷クニ至リ私有財産制及家族制度ヲ呪ヒ其ノ極打開シ難キ窮狀ニ陥リタル事實ハ被告人ノ第六回予審調書ニ於ケル精細ナル供述記載及之ニ照應スル押第一三一七号ノ三十二乃至三十八、四十一、四十四、四十五、百十七ノ友人宛被告人發送ノ書狀ニ依リ之ヲ認ム

本件ニ於ケル被告人犯罪ノ経路ヲ案スルニ被告人ハ其ノ中学時代早く既ニ慈母ヲ失ヒ一度ハ志ヲ立テ家郷ヲ出タルモ志ト違ヒ学成ラスシテ労働生活ニ沈淪スルノ已ムヲ得サルニ及ヒ茲ニ其ノ思想ニ動搖ヲ來タシ爾來其ノ孤立無援ノ悲境ト四圍ノ事情トハ相待テ益々被告人ノ思想ヲ惡化セシメ終ニ累ヲ皇室ニ及ホスニ至リタルモノニシテ被告人ノ環境ハ犯罪ヲ生ムニ与テ力ナカリシモノト謂フコトヲ得ヌ又被告人ハ公判

ノ最終ニ於テ自己ノ行為ハ其ノ懷抱スル主義ノ為ニハ仍正當ナリト思考スルモ 皇室ハ無産者ニ対シ直接ニ圧迫ヲ為スニ非サルニ拘ラス独断ヲ以テ一時タリト雖又単ニ手段ノ為ナリト雖皇室ヲ敵トシタルハ輕卒タルヲ免カレス共産主義者ハ必ラスシモ暴力ヲ以テ直ニ革命ヲ実現セントスルモノニ非ス言論思想ヲ以テ戦ハント欲シ唯タ権力階級ノ挑戦ニ因リ已ムヲ得ス暴力ニ訴フルモノニ過キス故ニ皇室ハ共産主義正面ノ敵ニ非ス若夫レ権力階級ニシテ皇室ヲ私シ之ヲ無産者ノ圧迫ニ利用スルカ如キコトアランカ共産主義者ハ皇室ヲ敵ト為スニ至ルヘキモ畢竟共産主義者ノ希望スル所ハ彼ノ英國ニ学ハントスルニ在リテ決シテ露國ニ倣ハントスルモノニ非スト陳述シタリ是被告人ノ犯罪動機ニ関スル信念ニ付若干ノ反省ヲ伝ヘ稍慚悔ノ情ヲ示スモノナリト謂フ可シ然レトモ被告人ノ行為ハ万世一系ニシテ一視同仁ナル皇室ヲ奉戴スル我國建國以來ノ光輝アル歴史ニ拭フヘカラサル一大汚点ヲ印シタルモノニシテ其ノ罪責極メテ重ク從テ叙上ノ情状アルモ其ノ罪責ヲ輕減スルニ足ラサルモノト認ム

法律ニ照スニ被告人ノ行為ハ刑法第七十三条ニ該当シ死刑ニ処スヘク押収ニ係ル押第一三一七号ノ二ノ藥莖ハ犯罪ノ用ニ供シタル物件同号ノ七ノ彈藥実包四個ハ犯罪ノ用ニ供セントシタル物件ニシテ何レモ被告人ノ所有ニ属シ刑法第十九条ニ依リ之ヲ没収スヘキモノトス依テ主文ノ如ク判決ス

検事 小山松吉、 検事 矢追秀作 本件 公判ニ関与ス

大正十三年十一月十三日

大審院第一特別刑事部

裁判長判事

判事

判事

判事

判事

横田 秀雄
 豊島 直通
 磯谷 幸次郎
 松岡 義正
 西川 一男

* * *